

デンマーク王立アカデミー建築学科とのワークショップについて

前崎 紀人 MAEZAKI, Norihito

武蔵野美術大学建築学科助手

デンマーク王立芸術アカデミー建築学部（本学協定校）と本学建築学科が、2010年11月8日～11月13日の一週間、本学で合同ワークショップを実施した。参加学生は本学48名、デンマーク王立芸術アカデミー18名の計66名。デンマーク王立芸術アカデミー美術学部建築学科のリア・ゴメス・キラモン講師、マーティン・コック講師、本学建築学科の高橋晶子教授、林英理子非常勤講師が教鞭をとった。

このワークショップは、『「すき間」から考える新しい住まい方』という課題のもと、谷中のフィールドワークをはじめ、東京とコペンハーゲンというまったく異なる文脈をもった都市のメカニズムを探りつつ、学生独自の視点で居住形態を探り、都市のあたらしい「すき間」のかたちをデザインするというものである。本来「すき間」とは物と物との間に生じてしまった結果物なのであるが、この課題の特徴として、

まず先に「すき間」をデザインし、その結果として物を生じさせるといった、時間軸を逆にした手法を試みた。

学生はデンマーク・日本の混合チームを編成し、意見交換を重ね、最終的に「すき間」の模型をつくり、プレゼンテーションを行った。実際の作業期間は2、3日しか与えられなかったにもかかわらず、デンマーク人学生の「すき間」の捉え方も交ざり、予想外の展開に学生・講師も非常に満足のいく内容で課題作成、課題発表を終えることができた。

また、課題とは別に都内へのエクスカージョン（見学、観光）も行った。初日は、デンマークの学生に東京の街を俯瞰的に捉えてもらえるよう、六本木の森タワー展望台へ上り、東京の街を360度の視野で眺めた。2日目は小平の江戸東京たてもの園にて日本の伝統的な建物を見物し、歴史的あるいは工法的側面から日本の建築物を見学した。最終日は都市住宅建築の名作、「塔の家」へ。欧米とはまったく違う文脈でつくられる、密都市東京における狭小住宅の実例はデンマークの学生には強いインパクトだったようで、熱心に住宅内を見学していた。もちろ

んデンマーク人学生だけではなく、日本人学生にとっても貴重なエクスカーションとなった。

もう一つの重要なプログラムであったのは、デンマークの学生は東京滞在中、ホテルに宿泊するのではなく、ムサビ生の住まいに1週間ホームステイをしたことだ。宿泊費を抑えられるというメリットはもちろんあるが、デンマークの学生には日本の住まいのスケール感を直接肌で感じてもらえる機会となった。ホスト役のムサビ生もこの機会に強制的に英会話に触れ、国際交流ならではのコミュニケーションの困難さを学んだことで、口々に英語修得の必要性に気づけたことは学生たちにとって大きな収穫だと言える。

今回は3月21日～3月27日の1週間、コペンハーゲンでワークショップを開催予定。ムサビからの参加は約29名。異国の地で学ぶ貴重な経験を通した学生の成長に期待したい。

編集後記

© Vol.11 は3月の発行となりました。今号より編集部にて尾内志帆（39回生）が加わりました。1999年の創刊から11年経ちましたが、次号は全面リニューアルを目標にしています。（KS）
©今号から編集部に参加し、立花直美先生へのインタビューに同席しました。在学中には知り得なかった、立花先生の環境と建築に対する深い考えに触れることができ、大変勉強になりました。次号以降もよい情報提供をしていきたいと思ひます。（SO）

フォルマ・フォロ
Vol.11 2011.3.1

編集：坂本和子、尾内志帆
デザインフォーマット：矢萩喜徳郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学交友会日月会
東京都小平市小川町 1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内
URL: <http://nichigetsukai.com/>

思考の道具

竹中 司 TAKENAKA, Tsukasa
28回生 アンズスタジオ
岡部 文 OKABE, Aya
38回生 アンズスタジオ

スケッチは、建築を思考する上で格好のものである。描かれた線の強さ、絶妙なカーブの度合い、幾重にも重なる線の動き、その全てが思考のプロセスであり、湧き上がる自由なイメージーションである。ところが鉛筆をコンピューターの作業に置き換えた途端、その生き生きとした思考が失われてゆく。自由さが失われ、もどかしさが強くなる。何故だろうか。

人間の創造性と道具の発達とは、密接な関係にある。宮大工が「削る」という行為だけで50種類以上ものカンナを使い分けのように、あるいはアーティストが描く手段をひたむきに模索するように、出来上がるものへの想像力とそれを可能にする創造手法へのこだわりは、互いに複雑且つ繊細に絡み合っている。創造手法が手の仕事であれ、コンピュータを用いた仕事であれ、想像力と創造手法の密接な関係性は、確固たるものとして存在している必要がある。

ここ数年の間でコンピュータによる電子化が進み、手で行われてきた大半の仕事がコンピュータに取って代わった。今日、コンピュータはほとんど全ての分野において、なくてはならない存在となった。この「コンピュータライゼーション」の流れは、コンピュータという共通のプラットフォームを築き上げ、異なる分野間で、情報を相互に共有することが可能となった。さらに近年、海外の建築界を中心に「コンピュータレーション」の流れが起きている。「コンピュータライゼーション」が手の仕事の置き換えだとなれば、「コンピューターション」は、手の仕事を越えてコンピュー

タでしかできないような仕事をしようとする流れである。

建築を思考する過程において、いよいよコンピュータが本来の力を発揮し始めようとしている。このような潮流の中、我々は新しいテクノロジーの可能性を最大限に引き出し、従来の手の仕事では難しかった新しい思考のプロセスを模索している。

最初に紹介する2つのプロジェクトは、日建設計の山梨知彦氏と彼が率いる設計チームとの共同プロジェクトである。

<ソニーの森プロジェクト>

ソニーの森プロジェクトは、大崎駅西口に建設されるオフィスビル計画の外構プロジェクトである。ここで試みたのは「いかにして都市に自然を感じられる森をつくるか」ということだった。都市からの視点、自然からの視点、そしてそれらに介入する人間からの視点、これら3つの視点を満たした豊かな森のデザインを模索した。

これまでにも「自然風な」ランドスケープデザインは存在していた。それらの多くが、

自然を直接模倣する手法をとっている。つまりデザイナーが感じた「自然」を意図的に描くという手法である。しかし実際の自然の森には、人間の意図など存在していない。存在しているのは、森を形成している樹木や草花が持つアルゴリズムの群である。各々のアルゴリズムが、刻一刻と変化する周囲環境に呼応することで、豊かな森が生まれるのである。

我々は森が育つルールを観察し、「種まきプログラム」の開発に取り掛かった。ここで提案したのは「自然の森が育つプロセス」を「デザインのプロセス」に置き換えるという手法である。具体的には、光・日照・風の流れ・地形などの自然環境情報、人の流れや交通量・建物の寸法体系などの都市環境情報、各樹木が好む環境・成長スピード・開花時期といった生物学的な情報をデータ化し、森が育つプロセスの過程でこれら全てを最適化してゆく。種まき、種間距離の分析、自然淘汰、群生の生成、道の発生、植栽の配置といった一連のプロセスの中に時間軸を取り込み、これを幾度も繰り返してゆく仕組みだ。

現在竣工中のソニーの森プロジェクトは、



風に揺らぐキネティックパネル (写真提供 / アンズスタジオ)

今年の春に完成予定である。皆さんも是非敷地に足を運び、乱雑でありながらも均整が取れた自然のリズムを感じてほしい。

<小学館 神保町 3-3 プロジェクト>

神保町 3-3 プロジェクトは、神保町に今年春完成予定の小学館のオフィスビル計画である。計画された建物は、既存の建物をひとつ挟んでコの字型をしており、2面のファサードが靖国通りに面している。

このビルの特徴は、自然換気システムにより生成される「風」である。この穏やかな風を利用して、風を感じるオフィス空間のデザインを考えた。雑多な都市の真ん中で、自然の風に呼応してゆったりと揺らぐ木漏れ日空間をイメージした。

最終的に、建物自身が風を感じ取ることが出来る軽やかな建築像が提案された。風とのインタラクションによって、建築自らが表情を変えることが出来るのだ。この表情の変化は柔らかな葉の動きに翻訳され、オフィス空間に不均一で心地の良い木漏れ日空間を提供する。ファサードを構成するアルミパネルは、内と外のダブルレイヤーになっており、内側のパネルは風によって揺らぐ機構を持っている。柔らかな光を演出するのは、これらのパネルに開けられた穴である。穴の総計は20万個に及び、それらの大きさの変化は10段階に割り当てられ環境解析データとL-system（自

然物の構造を記述したアルゴリズム）により繊細にコントロールされている。900枚以上に及びパネルのデジタルデータは韓国のファブリケーション工場に送られ、現在生産過程にある。

周囲の環境変化や人間の行動に対して、あまりにも受動的だった従来の建築が、ささやかな主体性とこれに反応する繊細さを持つことにより、周囲環境に呼応する軽やかな建築像へと進化を遂げようとしているのである。

<木製建築モジュール Neuro fabrics >

コンピューターションが建築分野にもたらしたもうひとつの大きな可能性がデジタルファブリケーションである。これにより、デザインから生産工程までのシームレスなプロセスを構築することが可能となる。これは大量生産を基盤とした従来の建築生産システムから、固有の環境条件に適応した新しい生産システムへの移行を予期している。

このデジタルファブリケーションの可能性を探求した木製建築モジュール「Neuro fabrics」の開発プロジェクトを紹介しよう。従来の経験的な手の仕事と先進的なコンピュータ技術を融合し、「木」の可能性を最大限に引き出す試みだ。

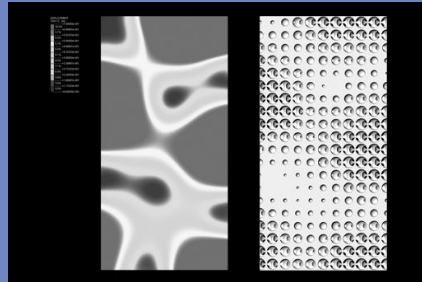
このプロジェクトは、主に3つの手法が連動して成立している。動的な関係性による形態生成の手法、形態生成と連動する構造の最適化、旋削加工技術のコード化である。動的な関係性とは、非常に単純な「関係性のルール群」からできている。これは、周りとの関係性によって形が変わってゆく、パラメトリカルな形態生成の手法である。ルールを定めておくことによって、全体像はプロセスの過程で次第に現れてくる仕組みだ。この形態生成、構造最適化、生産技術の3つの手法がデザインのプロセスにおいて相互依存関係を構築している。生成されるアウトプットは、各

プロセスにおいて注意深く観察・検証され、再びコード化されて組み込まれる。これを繰り返すことにより、プロセスが繊細に書き換えられ、更新され、独自の思考の流れを生み出してゆく。この行為こそが想像力と創造手法の理想的な関係性の構築であり、デザインという行為そのものだと言えるだろう。

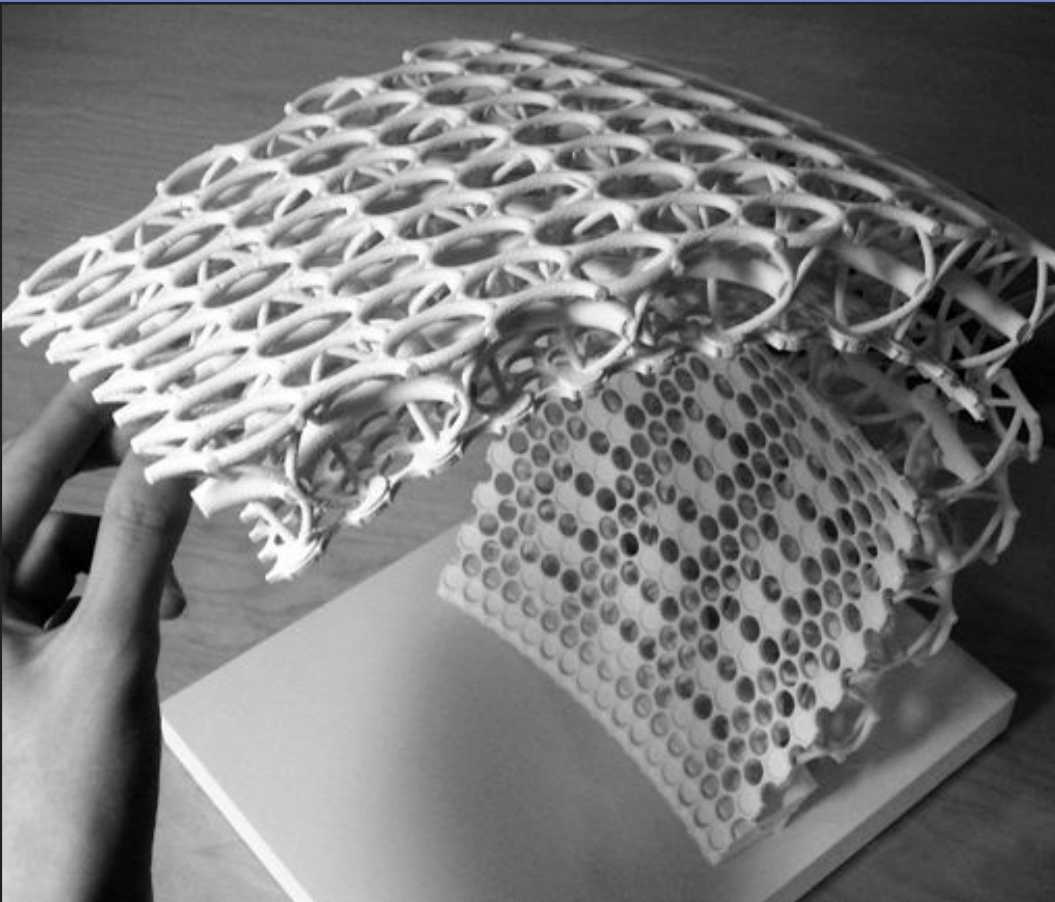
この手法を用いて、今回は積層するルールを定義し形態を生成した。具体的には、立方体から楕円球を抜き取り生成された構造物を積層し、この単純な行為によって現れる一見複雑な形状を特徴とした。これを構造最適化プログラムおよび強度試験データと連動させ、木の密度を変化させることで形態と構造強度の最適化を行う。本開発のプロトタイプは、今年3月に開催されるALGODE TOKYO 2011にて展示予定である。

我々にとってコンピュータは、単なる自動化のツールではない。コンピュータはまさに思考の道具である。人間の脳のように複雑に絡み合う思考の関係性をカタチにすることができる。

人間のイメージーションが、かつて存在していなかった新しいテクノロジーの力と出会うことによって刺激され、増幅され豊かさを帯びてゆく。こうしたコンピューターションがもたらす新しい創造の始まりに、我々はワクワク感を覚えずにはいられないのである。



構造解析と連動する形態生成 (CG提供 / アンズスタジオ)



武蔵野美術大学交友会日月会
URL: <http://nichigetsukai.com/>

フォルマ・フォロ

Mar.1 2011

vol.11 第11号

目次

インタビュー
立花直美
卒業生の素顔
竹中司・岡部文
WHAT'S NEW/
ランドスケープという
フィールド
長谷川浩己
建築山歩き
菊池宏

REPORT/
フォルマ・フォロ・セミナー
及び日月会のご報告
岩岡竜夫

TOPICS/
日月会活動のご報告
更田邦彦

製図室/
デンマーク王立アカデミー
建築学科とのワークショップ
前崎紀人

表紙写真：三層円筒型シェルモデル
デザイン / 写真提供：
竹中司・岡部文（アンズスタジオ）



(写真提供 / 武蔵野美術大学建築学科研究室)

環境と建築を巡る道程：武蔵美での年月を振り返って

立花直美 TACHIBANA, Naomi
武蔵野美術大学名誉教授 工学博士

Forma Foro (以下FF): 今日インタビューを快諾いただき、ありがとうございます。まずは学校生活を振り返って、お話を聞かせてください。

立花直美先生 (以下NT): 私は30歳で大学院を修了しました。その歳まで学生です。それまで設計は愚か建築の勉強はあまりやっていなくて、街を歩いて都市環境の理解に努めるばかりでした。所属研究室は武蔵美で言えば計画原論の分野、環境工学で、光・音・熱・空気の中の、光が専門でした。博士論文の審査員のひとりに芦原先生がいらして、都市の視環境評価に関する私の研究テーマに共感して「これは面白いね」と言って下さったのです。そして、ちょうど武蔵美の計画原論の先生が辞められる時期で、非常勤講師として来ないかとお誘いいただきました。武蔵美に来てみたら、みんなすごく明るく開放的で、いい雰囲気の学校でした。私は、学部は東京理科大学で、キャンパスもなくて技術的なことばかり教え



(写真提供：坂本和子)

る学校の中で、ひととおりの建築の勉強をやってきました。その後、大学院の7年間 は本郷のキャンパスです。武蔵美のように若者が集う明るいキャンパスの雰囲気は体験しなかったもので、とても魅力的に映りました。

大学卒業時、1961年当時ですが、建築界は女性の技術者を受け入れる土壌は無く、まして社員として受け入れる体勢は皆無で、たとえ準社員として入社してもそういう場所では何も身に付きそうにないし、まだまだ自分の勉強も足りないと感じていましたし、もう少し勉強かな、と。その頃は東京オリンピックも終わり、高度経済成長政策のスタートラインにあった時期、所得倍増めざして経済は一見好景気でどんどん伸びる一方で、都市の公害問題が量質ともに拡大した時期で、大気汚染、日照、密集、さらには風害までも様々な問題が起こっていました。これから建築を創っていくとすれば自分は何をすればいいんだろうと考え、また就職先もなくまだ勉強が足りないと感じたので、大学院に進学しました。都市の諸問題が膨らんでいる時期でしたから、建築の外のことが気になり、建築そのものや、まして室内のことなんて落ち着いて研究できないという気持ちがありました。研究室では先輩諸氏が室内の空気環境、温熱環境を研究。いまのような上質の室内空気環境は彼らの努力の成果だと思っています。でも私は一年生の仲間と屋外環境研究会をつくって街歩きを始めました。さらに優れた先輩乾正雄氏、保坂先生(同級生です)から、これからは人間の心理テストも大事だと教わり、そういった研究方法も学びました。

そういう流れで学んできたので、過一度の非常勤講師ですが、武蔵美に来て、計画

原論は本当は面白い科目のはずなのに、勉強が足りない私の講義自体はしどろもどろで、全然面白くなかった。(笑)ここ15年くらいのことですが、計画原論をパトントッチできるようなったときには、いち早く他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

えではありました。(笑)

当時はカリキュラムについても、「美術大学の建築学科はどうあるべきか」とか、「設計計画で、他の学校にはない設計中心の理論の教育がどこまでできるか」等たくさん他の先生(立花ゼミの卒業生の大西啓之氏・大井早苗さん)に頼んで、ほっとしました。ムサビ勤務最初の12年は非常勤講師で、計画原論1科目と、2年目からは設計計画で2年生の住宅を教えていました。気候環境のデーターを作成させたり、矩計の図面を要求したり、学生さんは嫌だったかもね。設計事務所は目黒にありました。ちょうど独立したばかりの山田敏子さん(伊東豊雄氏と同級生)の事務所に居候のようなものですが、女性4人で「女性を雇ってくれないなら、自分たちでやればいいんだ」と、事務所を立ち上げました。組織に属しないと仕事ができないのではなく、自分で力を蓄えていって、作品で勝負することができるところが、建築の面白いところだと思います。私の場合は作品というよりは、ものの考え方とそれの社会的な意義、そしてその先の未来を見据えていくということでしたが、富田玲子さん(象設計集団)の「起爆空間」という住宅を見せてもらった時のこと、彼女が、後輩である山田さんに対して「今の世の中と環境・社会をどういう風に捉えて、どんなものを創っていききたいの?」と聞きました。私に問われたわけではなかったけれど、その時「やっぱり私は街の建築を創りたいわけじゃないな」と自分を再確認した気がします。その後、非常勤を始めて12年たって専任になりました。坂本先生も竹山先生も保坂先生も、設計をやりながら大学も続けていらしたから、武蔵美だったら設計も続けられるかなと思ったわけですが、甘い考

ランドスケープというフィールド

長谷川浩己 HASEGAWA, Hiroki
武蔵野美術大学特任教授
オンサイト計画設計事務所主宰

私の専門領域はランドスケープ・アーキテクチュアといいます。カタカナで長いのが難点ですが、他に良い訳語も見あたらずこれを使っています。小さな庭園から大きな都市・地域スケールまで様々なスケールを行き来しますが、もとより対象となっている風景には敷地の境界なるものは存在せず、対象となる敷地を見つても、結局は世界という全体像を相手にしているとも言えます。

更に当然のことですが、世界は既に存在しており、多くの数限りない事物から成り立っています。ここにデザイナーとしてどう関わるのか。私はどちらかというと、「造り出す」というよりは「参加する」という感覚の方が適切に感じる人が多いようです。既にそこにある関係の編みに新たに

参加することによって、全く新しい関係が生まれてくるかもしれない。そのことへの期待が私がこの仕事をしているモチベーションであろうし、実際そのことを考えることはとても楽しいことです。

こうやって書いていると一体何をやっているのか分りにくいかもしれませんが、公園であったり、リゾートであったり、集合住宅であったり、キャンパスであったり、またはそれらを含めたもう少し曖昧な領域であったり、本当に様々です。

建築家と一緒にの仕事も多く、その縁もあって今回本大学で教鞭を執る事にも繋がりました。

変な言い方になりますが、実に当たり前のこととして建築は風景の大きな参加者であり、特に都市圏においては建築抜き風景など存在しようがありません。その意味においてランドスケープ・アーキテクチュアと建築は不可分の関係にあり、都市、世界、風景としての建築の在り方については常に建築家との密な議論をし、最終的にそれぞれのプロジェクトを通じて新しい関係の構築を目指したいと思っています。これはSTUDIO ON SITEと言う私たちの事務所の仕事にいえることですが、この学校の学生達に伝えたいことの一つでもあります。

多々良沼公園・館林美術館(写真提供:長谷川浩己)

参加することによって、全く新しい関係が生まれてくるかもしれない。そのことへの期待が私がこの仕事をしているモチベーションであろうし、実際そのことを考えることはとても楽しいことです。

こうやって書いていると一体何をやっているのか分りにくいかもしれませんが、公園であったり、リゾートであったり、集合住宅であったり、キャンパスであったり、またはそれらを含めたもう少し曖昧な領域であったり、本当に様々です。

建築家と一緒にの仕事も多く、その縁もあって今回本大学で教鞭を執る事にも繋がりました。

変な言い方になりますが、実に当たり前のこととして建築は風景の大きな参加者であり、特に都市圏においては建築抜き風景など存在しようがありません。その意味においてランドスケープ・アーキテクチュアと建築は不可分の関係にあり、都市、世界、風景としての建築の在り方については常に建築家との密な議論をし、最終的にそれぞれのプロジェクトを通じて新しい関係の構築を目指したいと思っています。これはSTUDIO ON SITEと言う私たちの事務所の仕事にいえることですが、この学校の学生達に伝えたいことの一つでもあります。

ただ、先に述べたように世界そのものは実に膨大な事物(あるいは意志を持った他者たち)からなります。雨、風、季節の巡り、植物、誰かの意志の痕跡、人々の営み、地形に潜むそこに働いた巨大な力、それらが響き合う動的な状況、いろんなことがランドスケープというフィールドの上で起きていることを先ず自覚しなくてはならないと思っています。

そこはある意味曖昧さが支配するフィールドでもあり、曖昧で、流動的で、多義的であるからこそ豊かな世界でもあります。その中をデザイナーとして泳ぐ方法はどんなやり方があるのか、どんなものの見方があるのか、私もまだよく分かっていません。ゼミでは一緒にそれらを探してみたいと思っています。

建築山歩き

菊池宏 KIKUCHI, Hiroshi
武蔵野美術大学准教授
菊池宏建築設計事務所主宰

今年で独立して7年が経とうとしています。それはまた、スイスから戻って同じだけの時間が経ったことを意味します。小学生の頃から建築家ゴッコするほど建築が好きだったので、放っておいても建築家にはなったかと思いますが、実のところ独立した時の気持ちは結構意外なことからでした。意気込んで独立したわけではなく、独立する気がなくなったから独立してみたというのが正直なところ。なのでそれほどガッツガツ建築に取り組んできたわけでもありません。スイスにいた時にかなりのんびりした生活に慣れてしまったこともあり、精神的に追いつくような仕事はできない人間になってしまったのかもしれない。

どちらかというときちゃんと休みを取り、遊ぶ時間を大事にする生活。実際のところかなり忙しく、週の中ごろに週末の予定を立てて、週末遊んで、週明けに遊んできた写真などの整理に追われる。これを繰り返しているだけでもかなり忙しいです。建築の仕事が入ると「えー」とどこか心の中で喜んでいるのか嫌がっているのかよくわからない声が聞こえます。独立をして仕事をしているわけだから、仕事が入ることはうれしいことなのだけれど。

周りにはほとんど頑張らないと言う人も多いけれど、私にとって建築熱のマックスは、小学四年生。どんなに頑張ってもその熱には到底かないません。どのぐらい建築熱があったかという、ひたすら朝起きて寝るまで無限に広がる間取りを描いていた、もちろん翌日その続きを描いたりしていました。(笑)

なので私の建築人生は、ずーっと下り勾配。しかし、悪いとはちょっと思っています。大事なものは、どんな下り方をするか。いかに

丁寧な下山をするかです。

自分にはいろいろな趣味があるけれど、今は結構山歩きが好きで、岩肌がそのまま山に露出している光景をみると、これこそ本物!と感じてしまいます。山を歩きだしたきっかけはもちろんスイスにいたときのだけれど、建築よりもたくさんの美しさを教えてくれたし、自信を与えてくれました。何よりも建築よりはるかに高い価値観から物事をみることがなにより楽しいし、心に余裕を与えてくれました。物質的な感覚が芽生えたのも、色が見えたのも、すべて山から。それまでよく見えなかったものが急に見えた瞬間でした。物事の大半は、学習によって学べるが、このような感覚は、恐らく学習ではなく、人間が本来もっている動物的な感覚を呼び起こす作業のように思います。時として学習というものがこれらの感覚を呼び起こすための障害になっていることもあるように感じられます。

「学生と、何をしたいか?」答えは簡単。つまらない建築から解き放ちみんなのもっているイケた感覚を呼び起こす。それに尽きると思います。

丁寧な下山をするかです。

自分にはいろいろな趣味があるけれど、今は結構山歩きが好きで、岩肌がそのまま山に露出している光景をみると、これこそ本物!と感じてしまいます。山を歩きだしたきっかけはもちろんスイスにいたときのだけれど、建築よりもたくさんの美しさを教えてくれたし、自信を与えてくれました。何よりも建築よりはるかに高い価値観から物事をみることがなにより楽しいし、心に余裕を与えてくれました。物質的な感覚が芽生えたのも、色が見えたのも、すべて山から。それまでよく見えなかったものが急に見えた瞬間でした。物事の大半は、学習によって学べるが、このような感覚は、恐らく学習ではなく、人間が本来もっている動物的な感覚を呼び起こす作業のように思います。時として学習というものがこれらの感覚を呼び起こすための障害になっていることもあるように感じられます。



大泉の家(写真提供:菊池宏)

フォルマ・フォロ・セミナー及び日月会シンポジウムのご報告

若岡竜夫 IWAOKA, Tatsuo
16 回生 東海大学

日月会主催の公開講座「フォルマ・フォロ・セミナー」の第2回(2010.4.24)では本学名誉教授の竹山実氏を講師に招いた。「もう一つのクロノロジー:コンペとプロポーザルを振り返る」という題目のもとに、実現しなかった多くのプロジェクト作品の変遷を紹介された。アンビルドゆえに建築家としてのピュアな思考がそこに現れ、更に鄭秀和氏(25期生)との対談では、最新の建築家の縮み思考の傾向に対して、広い視野で上を向いて世界と向き合うことの重要性を説いた。

セミナー第3回(9.4)では本学名誉教授の長谷川堯氏を講師に招いた。「私の<モダニズム>批評、その後」と題された講演では、「神殿か獄舎か」以降、一貫して建築のモダニズムの思想を批評し続ける理由を、キュビズム対チュビズム、そしてナーヴィズムといった概念を通して説かれた。対談者の大嶋信道氏(17期生)は、建築への関心や眼差しが長谷川氏の書物を通して広がったことを述べた。

2010年度から新たに企画された「日月会シンポジウム」は、多方面で活躍する日月会員の方々に、武蔵芸芸祭のホームカミングデーに合わせて建築学科研究室にお集りいただき、ミニレクチャーとシンポジウムをおこなうイベントである。第1回(10.30)は、真壁智治氏(2期生)、山山久美子氏(15期生)、笹口数氏(20期生)、竹中司氏(28期生)によるプレゼンがあり、続いて小倉康正氏(18期)の司会による今後の日月会の展望に関する座談会があった。多様な情報が乱舞する現代において、真の情報クリエイター達による説得力のあるレクチャーは、台風直撃の最中に参集した聴衆の想像力を刺激し続けた。

2010年度から新たに企画された「日月会シンポジウム」は、多方面で活躍する日月会員の方々に、武蔵芸芸祭のホームカミングデーに合わせて建築学科研究室にお集りいただき、ミニレクチャーとシンポジウムをおこなうイベントである。第1回(10.30)は、真壁智治氏(2期生)、山山久美子氏(15期生)、笹口数氏(20期生)、竹中司氏(28期生)によるプレゼンがあり、続いて小倉康正氏(18期)の司会による今後の日月会の展望に関する座談会があった。多様な情報が乱舞する現代において、真の情報クリエイター達による説得力のあるレクチャーは、台風直撃の最中に参集した聴衆の想像力を刺激し続けた。

2010年度から新たに企画された「日月会シンポジウム」は、多方面で活躍する日月会員の方々に、武蔵芸芸祭のホームカミングデーに合わせて建築学科研究室にお集りいただき、ミニレクチャーとシンポジウムをおこなうイベントである。第1回(10.30)は、真壁智治氏(2期生)、山山久美子氏(15期生)、笹口数氏(20期生)、竹中司氏(28期生)によるプレゼンがあり、続いて小倉康正氏(18期)の司会による今後の日月会の展望に関する座談会があった。多様な情報が乱舞する現代において、真の情報クリエイター達による説得力のあるレクチャーは、台風直撃の最中に参集した聴衆の想像力を刺激し続けた。

2010年度から新たに企画された「日月会シンポジウム」は、多方面で活躍する日月会員の方々に、武蔵芸芸祭のホームカミングデーに合わせて建築学科研究室にお集りいただき、ミニレクチャーとシンポジウムをおこなうイベントである。第1回(10.30)は、真壁智治氏(2期生)、山山久美子氏(15期生)、笹口数氏(20期生)、竹中司氏(28期生)によるプレゼンがあり、続いて小倉康正氏(18期)の司会による今後の日月会の展望に関する座談会があった。多様な情報が乱舞する現代において、真の情報クリエイター達による説得力のあるレクチャーは、台風直撃の最中に参集した聴衆の想像力を刺激し続けた。

日月会活動のご報告

更田邦彦 FUKEDA, Kunihiko
16 回生 日月会会長 更田邦彦建築研究所

会員の皆さまには、日頃から日月会へのご支援を賜り、執行部一同 感謝しております。お陰さまで、本年度の執行部の活動も一応の成果をあげることができました。

昨年9月には、日月会の活動基盤であるホームページ ([http:// www.nichigetsukai.com/](http://www.nichigetsukai.com/)) をリニューアルして、ニュースや活動のコンテンツを分かりやすく表示するとともに、「フォルマ・フォロ・セミナー」の録画映像がアップされるなど、内容も益々充実してきております。会員の皆さまにはこのHPをご覧ください。様々な情報を寄せいただくなど、日常の情報交換の場として積極的にご利用・ご参加いただければ幸いです。

また、幅広く会員の方々に参集いただく、仮称「代表者のフォロ」という意見交換の場も定着してきました。先日その名称も「プレ・フォロ」と正式に決まり、今後とも日月会の方向性を話し合う貴重な機会として、さらに多くのの方々の参加を募りつつ盛り上げていきたいと考えています。

昨年はこの「プレ・フォロ」のメンバーのもと、各期の幹事さん含め多くの皆さまの協力も得て、全会員を対象とした新たな連絡網作りにも着手しました。お陰で新たに600名近いメールマガジン登録者を得ることができ、日月会からの情報がより多くの会員に届けられる体制も徐々に整いつつあります。

来年度は、会員同士の交流の場となる新たな「フォロ」の発足を支援するなど、これまでの基盤整備のもと、日月会の次なる展開のキッカケ作りなども進めていく所存です。

3月末には、総会も開かれます。(別紙のご案内を参照ください)

会員の皆さまには、益々のご協力・ご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。